

「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力・判断力・表現力の育成～

I 主題設定の理由

音楽科では、これまで「わたしの音楽 みんなで音楽 ～音楽を形づくっている要素を感受し、自ら広げる音楽の世界～」のテーマのもと、一人ひとりがどのような音楽を表現したいのかといった思いや意図を出発点とし、仲間とともに共有し、音楽の世界を広げていけるようにすることを重点に研究を進めてきた。

これからの研究では、今まで積み上げてきた「音楽を知覚・感受し、音楽に対する感性を働かせる」学習をもとに、そこで培った感性を働かせ、他社と協働しながら音楽を表現したり味わったりする活動において、「そのよさや価値観を考えるなどして、創造的に表現したり鑑賞したりする力」を育成できるようにしていきたい。

この「よさや価値観を考える」ためには、音楽を聴いてその曲の特徴を捉え、また、音楽表現において思いや意図を明確にもち、自らの言葉で適切に表すことができるなどの力が求められる。これは、基礎・基本の習得とともに、音楽に関わる思考力・判断力・表現力等をどのように育成していくのかといった視点が重要になり、研究の中核となる。

授業においては、生活や社会における音や音楽の働きや、音楽文化についての関心や理解を深めることによって、生涯にわたり音楽に親しんでいく態度を育成できると思われる。これらを踏まえ、以下の3点を研究の視点とし、実践を行っていく。

【研究の視点】

- ①知識・技能を活用し、一人ひとりに主体的な学びを促す活動の工夫
- ②一人ひとりが明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫
- ③仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

II 研究の内容

1 研究の具体的内容

(1) 教材研究

- ・ 楽しみながら力の付く常時活動
- ・ 明確な学習のめあてと、それにふさわしい教材選択・教具の工夫
- ・ 「やってみたい！」と思わせる導入のあり方
- ・ 知覚と感受を両輪とした学習活動の組み立てについて
- ・ 小中9年間を見通した基礎・基本の定着

(2) 授業研究

- ・ 子どもたちが生き生きと主体的に学習に向かえる授業づくり
- ・ 音楽的な感性を十分に働かせながら楽しく学べる活動の工夫
- ・

(3) 明日の授業づくりと教師の技能向上のために

- ・ 授業に生かせる講習会・学習会
- ・ 教職員音楽会への出演

2 研究の方法

(1) 教協研究日（10回 うち統一授業研2回）

- ・ 塩山北中学校 水上 陽介先生（8月）
「曲にふさわしい歌唱表現の工夫をしよう」
- ・ 日下部小学校 武井 浩先生（2月）
「日本に古くから伝わる曲の特徴を感じ取ろう」

(2) 講習会・学習会

- ・ 「生涯にわたって音楽を愛好する心を育てるための手立て」（6月）
講師：大和小学校教頭 廣瀬 敦子先生
- ・ 「長唄・三味線実技講習会（8月）
講師：東音会 小林 百合先生
- ・ 「日本の伝統的な音楽の学習について」
講師：上野学園 山内 雅子先生（2月）

III 成果と課題

小中9年間を見通した学びの系統性と各分野の関連を意識するとともに、子どもたちがやってみたくなる授業づくりをめざして研究を行ってきた。

学習会では、小林百合先生に三味線の奏法、長唄の発声や指導のポイントを教えていただいた。実際の授業を想定して、効果的なアドバイスの方法などすぐに授業で活かせる技をご指導いただいた。学習会では、山内雅子先生をお招きし、我が国の伝統的な学習の実践について私たちの悩みに答えていただきながら先生の実践を紹介していただいた。また廣瀬敦子教頭先生からも生涯にわたって音楽を愛好する心を育てるための手立てについてお話していただいた。

研究授業では、子どもたちが主体的に活動する中で、音楽的感性を十分に働かせ、音楽の世界を広めていけるような授業をめざし、主学校鑑賞、中学校で歌唱の授業が行われた。鑑賞では、我が国の伝統音楽のよさを感じさせるための有効な方法や比較聴取について、歌唱表現においては、音程などの技能が不十分な子どもたちにはどんな手立てがあるか、歌詞からの表現の工夫もあるが、音の抑揚やつながりからも工夫ができるのではないかについても話し合わせ、多くのことを学ぶ機会となった。

課題としては、子どもたちにどのような力を付けさせたいのか、そのためにはどのような手立てがあるのか、そして教師自身が力量を高めるためにさらに研修を深めていく必要があるなどが出された。

(部長 鈴木 千秋)